

國學院大學學術情報リポジトリ

馬場明先生を評す

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樋口,秀実, Higuchi, Hidemi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000440

追悼

馬場明先生を評す

樋口 秀実

昨年（二〇一七年）四月九日、國學院大學名誉教授である馬場明先生が永眠された。今、先生の著作の一つである『日露戦争後の日中関係——共存共栄主義の破綻』（原書房、一九三三年）の「あとがき」「著者略歴」をみると、先生は一九三三年静岡県に生まれ、外務省の外郭団体である国民外交研究協会に勤務し、日本外交史関連資料の収集や歴史的事件・問題に関わった人物への聞き取り調査等に従事された後、一九七三年に國學院大學文学部史学科の専任教員として着任された。主要編著としては、前掲書のほかに、鹿島平和研究所編『日本外交史18 満州事変』（鹿島平和研究所出版会、一九七三年）、『満州事変と奉天総領事——林久治郎遺稿』（原書房、一九七八年）、『日中関係と外政機構の研究——大正・昭和期』（原書房、一九八三年）がある。

天才、秀才、英才、俊才など、人間の能力を称讃する言葉はいくつかある。そのなかで、馬場先生は、異才や奇才とい

う言葉がよく似合う人だった。とくに、馬場先生の書かれる論文は、型破りであった。普通、われわれ歴史研究者が執筆する論文は、序論・本論・結論の三部構成をとる。しかし、先生の論文は、本論しかなかった。したがって、序論に書かれるはずの課題設定や研究史の整理がなく、先生の論文が何をテーマとしているのが、把握しにくかった。さらに結論もないので、先生が最終的に何を言わんとしたいいのかも、理解しづらかった。また、史料の引用が非常に長く——ときには、二〜三頁に及ぶ——その史料に対する解釈もないので、先生の論文を読むのは、骨の折れる作業であった。

このような執筆スタイルを先生がなぜとったのかは、結局、聞きそびれました。しかし、処女論文「田中外交と張作霖爆殺事件」（前掲『日露戦争後の日中関係』に収録）など初期の作品には、短いながらも序文があるので、徐々に、こうしたスタイルに移行したのだろう。歴史研究者のなすべき仕事としては、歴史的事実を発見することとその事実に対する評価・解釈を下すこととの二つがある。先生は、このうちの前者を重視しておられた。先生は常々、「事実をきちんと書きなさい」「事実だけを書けばよろしい」と、われわれを諭されていた。先生が史料を重んじておられたのも、自分が解釈を下すよりも史料をもつて語らせたほうが事実をきちんと表現できると考えておられたからだろう。「史料を一字一句丁寧に

「読みなさい」とは、先生の言葉のなかで、私が最も印象に残っているものである。

馬場先生が本格的に研究を開始した一九六〇年代は、第二次世界大戦が終結してから日が浅いうえ、国家権力を批判視する、いわゆる左翼史観が流行していた。このため、日本近代史・外交史研究の一方法として戦争責任論・開戦原因究明論がもてはやされ、開戦をめぐる中央政治過程に参画していた人物・組織をむやみに断罪しがちであった。逆に、その過程でいかなる行為が展開されたのか、そこに参画した人物・組織が何を考えて行動していたのかなどの事実説明は後回しにされた。外務省の外郭団体に勤務し、歴史の当事者にインタビューされた経験などから、先生は、歴史的評価が事実よりも先行する傾向を快く思っていなかったのだろう。

その結果、馬場先生の研究に対しては、事実を淡々と描いているだけ、史料を貼り合わせているだけ、歴史的評価を讀者に委ねているとの批判もあつた。また、学会活動や学術交流を積極的にされない先生の個性と相まって、先生は孤高の存在のように噂され、日本外交史研究自体も、職人芸ともいえるような、他の研究領域との学際的交流をしない独自の領域とみなされることがあつた。

しかし、安易な歴史的評価を控えるという馬場先生の姿勢は、先生の研究成果を息の長いものにした。先生の代表作

『日中関係と外政機構の研究』、とくにその「後篇」に収録されている、満洲事変以降の日本での新たな外政機構——対滿事務局・興亜院・大東亜省——設置をめぐる論考は、この時代の政治・外交を研究するうえで、いまだに必読文献となっている。先生は日頃から、「三〇年、五〇年経つても色褪せない文章を書きたい」「時代を超えて通用するものをつくりたい」と口にされていた。歴史的評価は、その時々思潮や社会情勢に左右される。先生は、それを回避されたことで、本人が望まれた通り、真に色褪せない作品をこの世に残された。

他方、死者に鞭を打つよう恐縮であるが、教育者としての馬場先生は、門下生なるものを上手に育てあげることができなかつた。職人氣質ともいえる先生の性格は、いわゆる出来の悪い大学院生や研究者、その研究成果に対して寛容ではなかつた。また、先生は、俗にいう、酒に飲まれるタイプであつた。酒癖の悪さは、何名かの人間を先生の傍から遠ざけた。実をいえば、私も、その一人である。こうした追憶文を書かせてもらう立場からして、私は周囲から先生の一番弟子とみなされている。私自身も、かつては、そのように自任していた時期もあつた。しかし、最終的に、先生との関係は疎遠になつた。先生ご自身も、私を破門したものと思つているだろう。酒量の多さは、先生の研究者生命をも縮めた。健康上の問題から定年前に國學院大學を退職された先生は、その

後、目立った研究成果を残すことはなかった。先生の晩節を顧みて、誠に残念なことである。

とはいえ、学風・学統は、自然と根付くものらしい。昨夏、國學院大學で行なわれた教員免許状更新講習——中学・高校の先生方が教員免許状の更新のために受講する講習——で講師をつとめた私は、こんな体験をした。受講生のなかに、私より年上で、かつて馬場先生の教えを学生時代に受けた方がおられた。私は毎年、講習の最後に、私の授業を聞いた感想を、受講生である先生方に書いてもらうことを習慣としていた。その方は、受講後の感想として、「樋口先生の授業を聞いて、かつて受けた馬場先生の授業を思い出しました。お二人は、考え方が似ていますね」との趣旨を述べられた。父と絶縁したつもりの息子が年をとるにつれて思わず父に似てしまうように、血というものは、どうやら争えないもののようにある。

吉村道男先生への追悼文

柴田 紳一

元本学会評議員の吉村道男先生は、平成二十八年（二〇一六）十二月二十日、アーキビスト・研究者としての生涯を終えられた。享年八十五。

吉村先生は國學院大學史学科在学中から日露外交史研究者ピーター・バートン（南カリフォルニア大学教授）の日本の研究を補助するアルバイトに従事し、卒業論文の主題を加藤弘之とし、卒業後は外務省に入り、外交史料館を定年退職後は静岡県立大学で教鞭をとった。単なる二国間折衝史としての外交史ではない、日本の社会状況・国民思潮を背景とする外交思想史を目標とし模索し続けられた終生の姿勢は、学生時代に萌芽している。

著書に『増補 日本とロシア』（平成三年、日本経済評論社、旧版は昭和四十三年、原書房）、『道ひとすじ 外交史料館で考えたこと』（平成二十六年、風の里選書）がある。

先生は古書を含む書籍全般をこよなく愛好された。かつて北岡伸一氏の著書『後藤新平』（昭和六十三年、中公新書）が刊行された直後、先生は私に同書の感想を求められた。いた